今月の夢⑯

龍巻

赤瀬川原平

地平線に黒い縄が飛び跳ねている。荒々しく空が揺れ動く。何事かわからないが、ここから見えるはるか彼方で、すさまじい変動が起こっていることはたしかなのだ。ここから何キロほど離れているのだろうか。とにかく地平線といえるほどの遠くの方で、黒い縄が飛び跳ねている。

その不安定な情景は、目の前の町の家並に見え隠れしていて、その騒音はここまでは伝わってこない。ただ屋根と屋根の隙間をぬって、かすかに飛び跳ねる黒い縄が音もなく見えている。しかしその黒い縄のかすかな跳ね上がりも、ここからははるかな距離を考えてみるとき、その現場では嵐のような破壊力となっていることが想像できる。

「龍巻だ！」

私は生まれてはじめて龍巻を見たのだ。まさか日本にこんな龍巻があらわれるとは思ってもいなかった。だけどついにあらわれたのだ。あの地平線のあたりの小さな町は、もうほうきで掃き出したみたいになっていることだろう。

龍巻は、やがて間もなくこの町まで襲ってくるかもしれない。そういう心配をもってしまうほど、こちらの町は静かに、なまぬるく眠っている。今はちょうど午後の昼寝の時間、住民はみんな家の中に横たわっているのだ。

私はずっと龍巻の様子を見ていたいのだが、眠っているみんなにも知らせなければならない。しかし知らせている間に龍巻は消えてしまうかもしれない。とにかく写真にとっておくことが先決である。私は家に置いてあるカメラに、きのうフィルムを入れたばかりなのを思い出していた。私は龍巻を見失なわないように街道を選びながら、家のカメラへ走る。

私の知識では、龍巻というものは空から垂れ下がる漏斗のような形をしているものだった。しかし実際には空とはつながっていない分断された黒い縄のようなものが、はるか彼方の地平線の上で、分断されたミミズのようにピクピクと飛び跳ねている。空は黒い色の荒れた粒子になって、その無数の粒子が八方に散らばってスワッと集まり、地平線の上空にはおぼろ気に人間の形があらわれたりする。それが誰なのか、何故あらわれたのか、はっきり見わけようとしていると、その人間の形を形成していた荒れた粒子はまた空の八方に飛び散り、乱暴に波打ちながらまたスワッと集まると、今度はエモン掛けに掛かった洋服が上空にあらわれる。

「蜃気楼だ！」

私は龍巻が蜃気楼の現象を起こすことをはじめて知った。私はカメラを取りに帰るのがもどかしかった。このまま見ていないと消えてしまうのかもしれない。今後世の中はどうなるのかわからないのだ。

*

この夢を見た明くる十月三十一日、私の家は神奈川県警川崎警察署による家宅捜査を受けた。午後三時ごろ、コンコン、とドアを叩くので開けてみると、金文文字のはいった黒い手帖をヌッと突き出されて、背広の男が三人。一人が令状を示し、一人が家の中を見回わし、一人がカメラのフラッシュをたいた。

私はこの事態を正確に予想してはいなかったが、一週間ほど前から予感はしていた。川崎東映で「ニセ千円札」を使おうとしてつかまった男の記事がのったときから、私の肉体は引き締っていた。いずれその「基材」の制作にあたった私の所にも、何らかの手が伸びてくるだろうとは考えていた。

この家宅捜査の明くる十一月一日、私は川崎警察署に出頭し、同五日にも出頭して調書を取られた。まだ行かなければならない。書類送検は間違いなく、そして八分通り起訴になるだろうという。また裁判だ。

風雲急を告げると、夢もまた新しい皮をむいてあらわれてくる。このところ夢を見る方に忙がしく、書くヒマがない。

夕べは――私はピラミッドの中に雨宿りしていた。ピラミッドの途中のベランダには、浮浪者が一人居眠りをしている。私たちはどうせ雨がやむまでピラミッドの中にいるのなら中の階段を上までのぼってみようと話し合う。暗いピラミッドの中を三、四階まで手探りでのぼったところで目を覚ました。今日は川崎署へ三度目の出頭の日である。前回の千円札裁判では執行猶予だったが、今度は本当にはいることになるかもしれない。

夢は急激に豊かになってきた。そして身辺出入が激しく、心身ともに多忙をきわめてきた。いずれ刑務所の門をくぐることがあれば、獄中の夢をお届けしましょう。それまではこの欄を休載いたします。

目安箱——105

法律のおもてをかく

上野昂志

たしかに、お札の顔つきというのは憶えにくいものらしい。つい先日も、私とビンボーを競りあっている友人のKに、ピカピカの千円札を見せてやったら、この男、その小粒な眼玉をお札にすり寄せて、あっ、千円札っていうのはうす緑色をしてたんだなあーと吐息をもらすのだ。そうか、Kはこいつの顔も忘れちまったのか、で、お馴染みの札はどんな色？と訊ねたら、うん、ここんところ青一色専門、という。青一色とはうす緑の半分、つまり五百円札だ。いささか味わいに欠ける貧窮問答歌だが、ことほどさようにお札の顔は忘れられやすいということでもあるだろう。

だから、本誌の夢のエッセイの筆者であり、桜画報社の社長兼主筆であり、美学校の教授でもあり、桜子の父でもあり、桜幼稚園附属大学校校長でもありと、とにかく書いているこっちの腕が疲れ、むなしく紙を消費させるくらいの肩書きに埋まった赤瀬川原平氏の『美術手帖』での「資本主義リアリズム講座」の、もひとつオマケの「ダレにも出来ない楽しい工作」の、墨一色の千円札を切り抜いて貼りあわせて使ってしまったIさんも、お札の色についての記憶をなくした人だったのだ。彼もKのように、そしてその友人である私のように、うす緑色のお札を持ち歩かない類の人だったのかもしれない。これは、この大インフレ時代にはまことゆかしい人だ。彼は、持っていることを放棄している人だ。記憶も放棄してしまった人だ。そして、一身の危険をもかえりみず赤瀬川校長のお札の記憶テストに、現実的に参画したのだ。彼は、校長のいいつけに従わなかったけれど、自分の欲望に従い現実を遊んでしまった。本当に大学校生徒の鑑である。

だが、翻えって考えてみれば、Iさんは、記憶をなくした人なのではなく、きわめて想像力の豊かな人だったのかもしれないのだ。彼は、墨一色のなかにうす緑色を認め、スカシを読みとり、ノリで厚さをました紙に薄さを感じとっていたのであろう。要するにタダの紙っぺらのうちに紙幣を見、紙幣のうちにタダの紙っぺらを見るという運動を一瞬のうちに行いうるほどに想像力豊かな人だったのだ。ただ、不幸なことに、世間の人は、Iさんほどに想像力豊かではなかった。彼らはホドホドを取ったのである。中ぐらいもイイサ、というコマーシャルの信奉者だったのである。そのような世間においてIさんは、不可避的に孤独者たることを強いられるのだ。それは、先覚者の孤独といいかえてもまだ足りないであろう。だから、この一事をもって挫けてはいけない。だって赤瀬川校長にしても、お札で遊んでトガメを受けながら、それでも少しも挫けず、少しも反省せず、ちっとも更生の道を歩もうとせず、ずーっとお札をイジクリまわしているからだ。そうこうするうちに彼は社長にもなった、主筆にもなった、校長にもなっちゃった。Iさんだって大丈夫だ。Iさんに励ましのお札を！あるいは励ましのお便りを！

だが、ワルいのは、赤瀬川校長だ。新聞もいっているように、彼は、「作ってはいけません」などと「いましめてはいる」ものの、結局「興味をそそるように書いている」わけで、いましめながらそそるというか、そそりながらいましめるというか、要するに、生徒のほうは、そのいまし

めとそそるとのとにかかって迷うことになってしまうのだ。それはちょうど、一枚のお札を前にしたこちらの、記憶力をなくしていくところで想像力を発動させ、あるいは、想像力を発動させながら記憶力を押しのけるというような、両方の力が互いをはっきりと認知する瞬間のめまいに照応してしまっているのだ。校長は、そんな迷いが大きく育つように授業を進めているから大変よくないいや、もっとモロにワルイやつなのだ。しかも、これが初めてのことだったら、まあ中年気の過ちとか、ほんの好奇心の先走りとか、オッチョコチョイのやりすぎとか、まあ思いつく限りのいいわけをぶら下げることもできるけど、今度はそうはいかない。すでに一度、校長は校長になる前に、我と我が手でお札の顔つきを写しとり、それを使用前も後もとび越した使用中断の空間のなかにサラシモノにしたことがあるのだ。

そんなことをすれば、お札が怒り狂うのが当りまえで、またその旦那である国家が、よりによっておさつの裸を覗くとは！と嫉妬に狂ったのも至極もっとも、校長になる前の校長は、ために罰を受けることに相成ったのである。法律は常に絶対に正しい。だから裁かれた校長になる前の校長はワルイに決まっている。あとは法律の条文にピッタリはまりこんだ生活を規則正しく行って、ひたすら更生の道を歩んでゆけばヨイのだ。であるように、そう、まさにであるのにだ、ここで私は、以後校長になり社長になり主筆になり父になっているかの男に、あらん限りの悪罵の数々を投げつけ、ぶちかまし、アテこすってやりたいのである。であるのに、そう、残念ながら、であるのにという逆接の接続詞をこっちのほうに使わねばならないこと自体、無性に腹立しいのだが、法を守ること同様文法も守られねばならないので畜生！、であるのに、かの男は法にピッタリこんとはまりこんだ表現活動を行っているのだ。それは、あまりにもシツコク法の条文に己が身をそわせすぎているので、あからさまな非難をすることができない。だが、だからといって校長が正しく更生の道を歩んでるかといえば、断じて否、絶対にノーである。彼は、アクドク法律のおもてをかいている。もしこれが、法律の裏をかいているならば、ポリコは即座にかの男をひっくくるだろう、我々市民は、すぐさまかの男を摘発し、ポリコに告げ口するであろう。だが、残念ながら彼は、法律のおもてをかいているのだ。我々は、口惜しさに身をふるわせながら、彼の所行を指をくわえて黙認していなければならない。こんな苦痛がまたとあろうか。しかして見よ！おもてをかかれた法律がくすぐったさの故に身をよじって笑いをこらえているさまを。私にはその苦しみが痛いほどわかる……。

だから復讐してやりたい、仕置してやりたい。けれども、法のおもてをかく者をどうしてヤッツケルことができようか？答えはおのずと明らかである、やっつける方が法の裏をかくのだ。テロっちゃうのだ。法律的な罪にできなくても、ガサを入れたり尾行したり、しかも、かの男が道で立ち小便でもしたら即座にひっくくって拷問しちゃうのである。11月1日の新聞では、校長を取り調べるとポリコがいっていると報じている。ここでの狙いは調べることではなく、取ることにある。トルとは広島ヤクザ用語では殺スの意味だ。ポリコも頑張ってくれているのである、あたかも、赤塚不二夫描くところのオマワリのように。

連載随筆――㉖

コップ霊との対話[10] それは予言ではなかった!

鈴木岬一

真冬、それも正月に近い頃だった。私たちの山小屋に、何んの前ぶれもなくKという友人が遊びに来た。Kは、私たち同類とちがって、東大で地質学を専攻する科学者のタマゴで、それに秀才だった。

私たちの同類は、みんなKを崇敬していたし、年令的に見れば、私たち同類の三人よりも二つか三つ、Kは若かったけれど、われわれの同類は皆んな画描きだとか、詩人だとか、小説書きみたいなヤボな仕事をしている連中ばかりだったので、この地質学を勉強しているKという友人の存在は、大へんに貴重なものだった。だから、私たちの山小屋にKが訪ねて来てくれたと言うことで、その到着した夜など、私たちはKのために牛肉の缶詰をあけて大宴会をひらき、Kを歓迎した。

所が、Kが到着したその夜、どうしたわけか天候が急変した。この山梨県の富士五湖の一つ、西湖という湖では二十年ぶりだか三十年ぶりだかの、大暴風雨が襲いかかった。

私たちの山小屋は、おそろしい強風と豪雨で、ぐらぐらと大ゆれに動き、屋根は吹き飛ばされる様に、ごうごうと音を立てた。

冬の豪雨は、時々、ミゾレに変るし、湖面は高波のシブキで、真っ白に変化した。私たちは、一睡もしないで山小屋を守りぬいたけれど、なんとなくKがこの暴風雨を持って来た様な、そんなユーウツな気分になり勝ちだった。

「バカ言え、オレはお天気男なんだぞ」と、Kは懸命に、弁解をした。この大暴風雨は午後九時ごろから、翌朝まで続いたけれど、夜が明ける頃になると、黒雲が湖の上を走り去って、元通りの静かな湖になり、明るくなるにつれて、今度は逆に物凄いばかりの（風が少しあったけれど）快晴のピーカンになった。

「おい、見ろよ。あれは何んだ!」と、お天気男のKが湖の岸を指指して、怒鳴った。ベランダに飛び出して見ると、山小屋と岸までの間の岩の上に、真黒な大木が一本、ごろんところがっていた。

「どこから流れて来たのかな?」「いや、ちがう、湖だから流れて来る筈がない!」「じゃ、きのうの嵐で湖底から浮き上ったんだ!」「それ、行って見ろ!」と、私たちは、急いでその大木の所まで素っ飛んで行った。なにしろその大木は五メートル位の長さで、大きさは直径約一メートルの古木で、年輪を調べたら一世紀余は経っているモミジの幹だった。もちろん、一人や二人で動かそうとしても、微動だもしないばかりか、昨日まで湖底に沈んでいたから水をたっぷりと含んで、岩石の様だった。

私たちの山小屋は、湖の岸から約五〇メートルばかり離れて建っている。その山小屋のすぐ目の前に浮上したのだから、われわれの所有物だと宣言しても問題はないだろうと言うことになった。私たちの計画では、このモミジの大木を適当な寸法で輪切りにし、ベランダにかつぎ上げて自然のままのテーブルにしたり、腰かけになると、考えたのである。今で言うならば室内装飾としては、最高のインテリアである。

私たちの同類である画家のMやCは、「儲かった、儲かった!」と、大よろこびだった。だけど、Kだけはどういうわけか深刻な表情で、クビをかしげていた。

「おかしいな、どうしてこんなモミジの大木が湖の底に沈んでいたのだろう?いや、もしかしたら……」と、Kは、この時、不吉な予感を早くも感じていたらしいのである。Kは、私たちの計画した美的インテリアの案に、猛烈な反対を始めた。

「この大木はそのままにしておいた方がいいよ。せっかく、浮き上って来たんだからさ」と、科学者らしくもない説明不足の言葉で反対をした。もちろん、私たちだってこのモミジの大木を一日か二日の短時間で、輪切りに出来るとは思っていない。第一、道具がないので、私たちは村まで出かけて行った。村の青年たちは、山小屋のアンちゃ

①ハゲチャン
④山中せんしゅ
③タイオンケーのタイチャン
②こぶとりじいさん
Illustration 仁志&伸坊

んたちが何をするズラとか言って、面白半分に大きなノコギリや、マキ割りを出して貸してくれた。だけど、村の老人たちは私たちの話を聞いて、サッと顔色を変えた。

「いけねえぞ、その木を切っちゃならねえぞ、その木はゴンゲン様の柱だゾウ！」

私たちの同類は、どうも無神論者が多かったけれど、村の古老たちの感情だけは傷つけたくなかった。しかし、ノコギリなどを貸してくれた青年たちの手前もあって、すぐ中止するわけにも行かず、仕方なく道具を担いで山小屋へ引き上げた。だけど、もう大木を輪切りにする元気はなかった。「ケチがついた、もう止めようぜ」と、あっさりと断念した。

だが、Kだけはこのモミジの大木がコツ然と湖の中から浮上した現象に、大きな疑問をいだいていた。いや、Kはどちらかと言うと、村の古老たちの話を信じているらしかった。それがゴンゲン様の柱であるかどうか、そんなことは科学者のタマゴであるKは口に出さなかったが、たった一つ、モミジの年輪を調らべた時、この木は自然のまま朽ち果てて湖の中に沈んだモノではないと、推理を下していたのである。

私たち同類たちは、山小屋の住人にちがいないが、一日中、何もしないでごろごろ遊んでいたわけではない。私たちは、冬になると、炭焼き小屋で働いていた。炭焼きの下働きである。寒い冬な

ら、火を入れたカマ番なら暖房になるだろうと考えたが、カマ番はケムリの色で炭の出来具合を判断する大事な役割があるので、爺サマはなかなか許可して呉れなかった。私たちは、ショイコという木の枝を組み合せたリュックの様なもので、山から丸太を運ぶ重労働の仕事を担当した。私たちが炭焼き小屋で働いている留守の間、Kはたった一人で村に出かけ、何やら調査を続けていた。何を調査していたのか私たちには何も語らなかったけれど、Kは「大事件」を予想し、ほぼ結論を持っている様だった。

「Kよ、お前、何を調らべているんだ?」と、質問したら、Kはポケットからケシ粒の様な岩石の破片を取り出した。

「何んだい、このカケラは?」

「よく見てごらんよ、これはガーネットという宝石の原石さ。ガラスに色がついた様なのはアメジスト(紫水晶)だよ」

私たちは、この西湖でそんな宝石が出るとは夢にも思っていなかったので、目を丸くして吃驚した。

「おい、本当か?」「どこで拾ったンだ?」と、盛んに追求したが、Kは「こんなカケラでよかったらどこでも落ちてるさ」と、笑っていた。ばかに簡単に発見できる様な話だったけれど、私たちがいくら湖の中を探しても、宝石の原石など一つも見つからなかった。指輪かなんかの形になって落ちているならばすぐ分るけれど、原石を探し出すのは地質学の知識が多少なりともないと、やっぱり大変なことだった。

Kが、私たちの山小屋に同居し始めてから、私たち同類はその生活態度や、考え方がだんだんとKの影響を受けて、変化するのがよく分った。物事を、科学的に判断するクセの様なものが訓練されたのである。

こんなことがあった。村の青年が、非常に珍らしい溶岩の化石を二つ持って、山小屋にやって来た。西湖と精進湖の間の、溶岩の樹海で、見つけたものにちがいない。二つで、二円だったか三円で買ってくれないかという註文だった。それは、溶岩に松の木が完全な形で化石化している珍らしいものだった。Kは手にとると、私たちにそれを説明しながら、これは珍らしい物ですと、言った。値段も高くありませんと、賛成したので私たちは安心して、二つの化石を買うことを決心した。すると、Kは、急にお金を出して買うならばおやめなさいと、意見を変えた。なぜ、やめろと合図したのかその時は分らなかったが、村の青年が帰ってしまうと、Kは次のようにその理由を説明した。

「あの溶岩の化石は、たしかに珍らしくて貴重な化石ですがね、でも、どこでそれが採取されたのか確証がない場合、私たちは信じない事にしているのです……勿論、あの二つの化石はこの西湖が出来た時の宝永山の溶岩にちがいないと思います……でも、その現場に立ち合っていないし、富士の樹海の中で採取したという証拠がない以上、本物だと知っていても、それを認めるわけにはゆか

ないのですよ。でも、たしかに珍品でしたね！」
私たち同類は、なるほど科学者と言うものは仲々きびしいもンだな、と思ったし、たしかにお金を出したのでは価値がないモノだった。
Kは、湖の底から浮び上ったモミジの大木から推理の糸をタグリながら、ついに西湖村の全滅について、不吉な「予言」をしたのである。西湖の村は、三方を山に囲まれた三角形の急斜面の高原にあって、前方は湖に面している小さい村だが、この村の火山岩はモロクて不安定で、その上に村が浮んでいるみたいだと言うのである。万が一、暴風雨か長期の雨が降ったら、それこそ怖ろしい「地すべり」が起き、西湖の村は地の底に埋れてしまうだろう。地質学的に判断すると、老年期の火山岩の上にある村だと、結論を下したのである。そして、約二百年位前、大豪雨がこの地方に襲いかかった日、西湖の谷間は激流と化し、巨大な岩石がごろごろと山からころがり落ち、その時、モミジの大木が湖底にすべり込んだもので、もしかすると本当にゴンゲン様かお寺の柱だったかもしれない。そんな柱を輪切りにして、山小屋のインテリアにしたら、それこそおシリが曲ってしまったことだろう……。Kは暴風雨でコツ然と浮び、あがったモミジの大木を見て、地質学的に西湖村の地すべり現象を推理し、それを調査し、はっきりと「西湖村全滅」をその時（昭和十四年冬）に、予言してしまったのである。
Kは、それから間もなく学徒動員で軍隊に引っぱられ、そして南方の油田地帯を開発するための特殊部隊の一兵士として出征し、そしてチモール島で死んだ。だから、私たちは、この山小屋で別れた日がKの最後だったのである。私たち三人の同類は、戦争という時代を通過しながらも、死ぬこともなく生き残ったわけだが、Kが予言した西湖村の悲劇は、なんと不幸にも三十年後になって適中してしまった。今から七年前、山梨県下を襲った大豪雨で、南都留郡の西湖村と鳴沢村は山津波のために全村がカイ滅した。私たちが知っている青年や老人の大部分が、今でも土の中に埋まったままになっている。月見草の咲く高原の、私たちの山小屋も、炭焼き小屋もみんなすべてが全滅してしまった。
モミジの大木はその後どうなったかと言うと、その豪雨になる前に、雨と風が強く吹いた夜、いつの間にか砂の中にもぐり初めて、又しても湖底に沈んでしまったそうである。あと何年後に（百年後か、あと一週間後か）このモミジの大木が、湖の中から浮上するか分らないが、もし西湖のどこかの岸でこの大木が浮び上った時、私たち同類の三人は（もしその時まで生存していたら）もう一度、ゴンゲン様の柱と対面してもいいと思っている。なにしろ、約五センチほどノコギリの目が入っているからすぐわかる筈である。

（後記）「コップ霊との対話」は、今回をもって終了いたします。

呉智英の劇畫列仙傳

凄い絵

つげ忠男「きなこ屋のばあさん」より

劇画論第二弾と銘うって、「サンデー毎日(10／21)」に大島渚が声高に叫んでいる。要旨は、若者、暴力、セックス、反秩序、反学校教育、現実拒否、ハングリーアートということになる。

どういうものだろう、こういうのは。いい劇画もあれば、つまらないのもある。この単純な真理が、わかっていないわけでもなかろうに、この手の反教養主義をひけらかすのは、うんざりする。

それで想いだしたが、大学に入ってすぐの頃、サークルで、映画が好きだという男がいたので、私は、これは話せる奴かもしれないと思ってそいつの所に行き、「君、どんな監督が好き?」と言ったら、即座に、俺はそういう観かたをしないとハネつけられて、恥かしい思いをしたことがあった。今にして思えば、そういう観かたをしないと言い放ったあの男は、どんな観かたで、映画を見ていたのであろうか。

上野に昂ぶった志とともに降りたった私の最初のダメージであった。

ドヤ街、歌謡曲といった、一見、反教養主義につらぬかれているようなテーマを選びながら、やくざなモダニスト顔負けの現代性をもっているのが、つげ忠男である。

「夜行」No.2の『遠い夏の風景』が、決定的な出会いであった。

まるで陽光ふりそそぐカフカとでも形容したくなるこの作品は、インチキモダンな作品の読後感につきまとう、あの安っぽさがまるでない。

ああ、これは信じてよい、このモダンさは風化をはっきり拒否している、凄い、と思った。この「凄い」は、「すごい」ではない、まことにあの暗い作品群の凄みなのだ。

『遠い夏の風景』から溯り、つげ忠男の作品をよみかえした時、冷や酒の酔が噴き出すように、感動がせまった。

『丘の上でビンセント・ヴァン・ゴッホは(「ガロ」'68 12)』で、つげ忠男は復活したらしい。らしい、というのは、それより前の作品については私は全く知らないからである。

以後、おおかたの読者には、どうやらつげ義春の弟という目で見られているようだ。不幸なことだ、才能ある兄と才能ある弟では、ブロンテ姉妹よりもしまつに悪い。

旅行もの、釣りものを描いている類似性もあるだろう。『桃色遊戯(「ガロ」'71 12)』の風景描写が、つげ義春風だし、さらに『アスファルト舗装(「ガロ」'72 8)』は、つげ義春『夢の散歩(「夜行」No.1)』と酷似している。もちろんこのことは、どちらがどちらに影響したとか、遺伝学の資料にしようとかいうようなことではない。つげ忠男は確実に自分の作品を描いている。

『ゴッホ』をみることにしよう。

彼自身、対談('69 8「ガロ」)で語っているように、これは小説的、特に私小説的である。ともすれば、すうっと見過されてしまう懸念すらある。

だが、無駄なく構成された主人公とゴッホの絡みあいが、時に自己を最前面に押しだしある時には、さらりとつきはなし、特異な重量感を持っているのが、心ある読者にはわかるはずだ。

154頁155頁の土手のシーンの猛々しい凄味は後の作品にまで強い低音としてひびいていく。

次回、もう一度、つげ忠男をとりあげる。

いよいよ筆の冴える「劇画列仙伝」、良い作品、作家は必ずとりあげる、未だ取り扱われない人も、ひがむことなく励まれよ。

読者サロン

三角の月

三上雅火子（大阪）

何かの溶液を水にとかして、何日もたったあと、水の面に、薄いうわずみができあがる。それをちょいとばかりに紙の中におとすと、「君と旅する」が出来あがっちまった。しかたないから、セリフを入れたら、これは、ごりっぱな漫画じゃねいか。からから涼しい頭の裡に、スイと、飛びこんできやがる鳥かなんかみたくに、こんな思いがこみ上げてきてしまった。それではといって、いやいやほめやしないぞ。読者なんてあてにする面じゃねいや、意地つぱりではしかたのない。ああ、こりゃ口おしい。ほんとは、ほめたいのだぜ兄貴。だが、しかし、調子に乗ってやがるのは気に喰わねえ。気に喰わねえから、やっぱり、気にしちまうのだ。そろり、そわそわりと走る一本ヅノの鬼だけで、自分にゃ一パイのおもわくがうまれちまった。

と、ここまで書いて、どうも、自分でしらけてしまう。稲垣足穂の、月は、三角だという話。あんな、インタアプレイ。自分はすごいと思ってしまう。それは、一字書いたその音が、あとの一字に作用してる、悪くいゃあいきあたりばったりの文。鈴木さんは、ようやく、インタアプレイしはじめたみたいに思う。コマが次のコマとインタアプレイしているみたくに、そりゃ、時には雑音やが、しばし、するどい悲しみの安堵感にひかれてしまう。だから、それには、つづくなんてえのは縁がねえだろう。「君と旅する」は、あんたすずしいインタアプレイだよお。まちがっても「悲しみの世代」じゃねェ。安部みたいに、スジのなきごとき、シュウトウなスジだてのコマからは、何のインタアプレイも聞こえてこんよ。人で遊んでていいじゃねいか、けっこう売れてるんだから。調子にのれよ。セリフのないコマとコマのインタアプレイ、自分はまち遠しい。セシルみたいになっちまえ。あれでも好きな奴はゴマンといる。

最近の読者サロン

村上知彦（兵庫）

最近の読者サロン、やたらと女のシトがのさばってて、これはとってもよくない傾向だと思うのです。ガロなんかを読む女のシト、それも十六〜七才の女のシトたちがどんどんふえているのかと思うと、そらおそろしくなります。彼女たちはきっと、ガロの他にも「婦人公論」や「微笑」など読んで、どんどんツオくなっていくのです。十月号の鈴木翁二が好きだというメリメリのシトなんかいい例です。彼女たちがやさしい男を好むのは、ツオくなってる自意識のあらわれに他なりません。

そんな女のシトたちが好きなのは、決まって安部慎一、鈴木翁二、そして林静一なんです。赤瀬川原平や川崎ゆきおが好きだというシトには出会ったことがありません。やさしい女、男を包みこむといったやさしさではなくカレンな感じの女の出てくるのも好まれないようです。たぶん彼女たちは真剣にガロを読んでいて、そこにでてくるツオい女のシトたちのように生きたいと願っているんじゃないかな。彼女たちはたいてい浅川マキなんかが好きで、ひとりでお酒をのんだり街をぶらぶらしたりするのが好きで……。

「気分」なんです。頭よりさきに身体で、生活でわかっちゃおうとするんです。だから、生活を超える論理や夢や思い入れを語ろうとする、赤瀬川原平や川崎ゆきおの世界は、彼女たちには受け入れられないんだと思います。ごぶさたしてるけど、ぼくの大好きなつりたくにこなんかのもそうじゃないかな。だから、ぼくら心やさしい男の子たちが、メリメリの女のシトたちに誇りをもって語れる部分といったらもはやこれだけなんだから、原平さんの「不可思議譚」ほんとにほんとに期待してます。

また読みはじめる「ガロ」に

井上康二（兵庫21才）

二年ぶりに開いたガロ。その変貌ぶりに驚きそれが整形によるのか、化粧法、美容体操かと考えてみた。呉智英の評論があった。「終末から」で読者をニヤリとさせるような辞典を作ってるんではないか。「衒った手法で生死を描こうとするような〝ナウな作風〟とは全く無縁である。」と、楠勝平について述べている。全く同感だ。今の劇画、なんと前衛的なるものが安易なしろものにすり変っていることか。週刊誌漫画の中でもこういった観念を弄んだ作品をよくみかける。実に過不足なく手際よく描いてあるが、作者のほくそ笑んだ顔が覗かれるのは幾度やしれぬ。こうなると楠氏のあの絵を見たくなる。それは僕のイメージとして「死」が日向ぼっこをしている感じであり、冬のハエをひねりつぶそうとする老人の顔だ。

ふじ沢光夫がいた。骨が顔をみせている人間。おっかさんのノドチンコをいじくる少年。少年の頃に持つくだらない、しかし当人には大切な疑問を、とてもざっくばらんに描いてくれる。第一、これ程ユニークという語がピッタリの絵もないからなあ。

夏草しげのぶの作品。「わあ、気持わるい線やな」とつぶやき、それでも来

号にも登場してほしいというようなこわいもの見たさを刺激する。

山根貞男の映画評がない。この二年間いろんな映画雑誌を読んだが、山根氏の評論ほど分りやすい言葉でうまく論じたものに出会わなかったから、ちょっと残念である。

増村博の「母なる大地の子供たち」は内容とは似つかぬすごい題だが、元来猫は無口なもんで、こんなにオシャベりさせるのは余程のことと思うが、意味ありげに描かれた作品は、神経質な人間にはちょっぴり毒である。

昨今の諸雑誌は「先生といわれるような馬鹿ばかり」といった風情で、なんともこそばゆくて仕方ない。「ガロ」よおまえもか、となりませぬよう、ものわかりの悪い、なんとなく考え込んでしまうような雑誌を。僕はトンボの眼玉のようになるだろう。

「君と旅する」にかこつけて

秋山しげのぶ

鈴木オウジ作品はどこか何かしら不安定だ。これも又不安定だ。各々のフレーズを関係無視の偶然感覚で繋いでいるのか、フレーズ内部の可能性、内存能力を直感連繋しているのか判らなくなってくる。

メインフレーズは六郎衛門セキ夫妻の物語としておこう（これも各フレーズの束なのだから）。

それから現在風景の内のタバコくわえ作者と六郎のホオズリ三コマ、これはもともと前後メインフレーズの内の一つなのだが、想像の方向性が逆行しているので悪性傷口状に突起してしまっている。

作品成立の想像方向は（作者（描き手であり想像主体）→スジの概念（発想）→細部フレーズ→細部フレーズからの連想フレーズ」と（作者→細部フレーズ→連想フレーズ→フレーズ同士の弁証によるラシキモノとしてのスジ」とまあこの二つが一般的なのだが（ここで一般的というのはこの様式で成立した作品が一般的だというのではけっしてなくて、一般的に想像物質―ともいうべき反応する記憶物質―がその様な回路を通過していこうとする力性を内包しているということだ）、実際には前後もどりとか、大小円環グルグル回りとか、偶然くわえ込みなんかで副次運動を起こすワケだけれども（それは作品が作者をして作品を描かすと云うアレである）、読み手も又逆手からこの方向性を頭蓋骨内で活発化させながら読み込むワケである。このタバコくわえ三コマはメインフレーズの連続時代性からのギャップと、六郎と作中作者との虚構深度のギャップでメインフレーズからのハセイフレーズと云うよりも、孤立フレーズのメインフレーズへの歩みよりという印象の方が強い。それならこの独立フレーズの挿入はあと二、三回位発生して虚構深度を弁証させながら一定宙づり状態にもっていくだろうと。しかしそういう風にこの作品は出来ていない。後に述べる最終二ページのためにこの三コマはつまみぐいの様な欲望的思いつきにしかなっていないのである。

そしてもう一つ、ちょっとした大きな欠点がこの作品にはある。「カラカラと鳴る母の姿を抱きかかえ子供は嬉しそうだった」という茶カンを抱いたフルチンにこにこ六郎のコマだ。このコマから茶カンの中は母の骨であると確信した読み手は何人いるだろう。首すじ整髪夫婦のすばらしく穏やかな日なた風景数コマへの執着欲求から、ただ子供のサッカクなふるまいとも読めるではないか。（どんなに読んでもケッコウと自由病的にやりすごすにはこの骨のイメージは作品内のカナメでありすぎる）このくやしい宙づり状態は「ガりと涙のにが薬」のコマにも「六郎衛門火葬」のコマにも「新規骨薬を青年背おいゆく」のコマにも尾を引いてしまう。もし「穏やかな整髪夫婦」のイメージで終止する作品なら、最終ページも、そして前述傷口突起状三コマもそのバラバラ作用で最初に述べた「関係無視の偶然感覚作品」として、こうしてわき上がる僕の言葉の興味以外のものである。

ではいよいよ最終ページ………。

この二ページは虚構深度の大きいメインフレーズが徐徐に浮上して現実（これも又虚構でしかないがその深度は最小である）との接点をさぐる様に配慮された特異な二ページなのである。前述傷口突起でメインフレーズの深度が乱されてならない所似がここにある）その正に中間項の接点にこれまた前述の骨のイメージがある！　メインフレーズから行商にやってきた青年、と義歯セールスマンたる作者の父（正に義歯！義歯セールスマンだ）、そして、汽車窓からの風景を鏡にして日ヤケシートに沈む作中作者、から作品身もとひきうけ作者と。グッグッと浮上してくれるイメージ物質のあり様は見事ではないか！何にもましてセールスマンのさげたトランクの内で義歯はその光を放ちつづけている！

こういう作品が出てくると静かな昂揚期がやって来た様に僕の心はおどるのである。

通信欄

●「赤色エレジー」「うた絵本」「僕夢」「紅犯花」いずれかを適価でおゆずり下さい。御連絡待っております。
〒061―37 北海道石狩郡当別町太美町二区☎(013326)33 〈辻野真利子〉

●水木しげるの貸本屋むけの本、コダマプレスの「墓場の鬼太郎」東考社版「不死鳥を飼う男・手袋の怪・釣り落とした魚・空のサイフ・ああ無情」を定価の倍で買う。まとめて売る方、つげ義春特集②・「鬼面石」を差し上げる。なお「蟻地獄」を「河童膏・忍法屁話・古墳大秘記(各水木しげる著)と交換して下さい。
〒363 埼玉県桶川市泉2―14―15 〈神田満〉

●樹村みのりの作品（特に「雨」「こわれた時計」「海へ」）の載った雑誌譲って下さい、切りぬきでも可。適価にて「哀しみのベラドンナ」のポスター「こどものとも」の最近2・3年のもの「光文社カッパコミックス版「鉄腕アトム」それぞれ適価で譲って下さい。
〒500 岐阜市加納栄町4―38 〈渡辺孝也〉

●東考社版水木しげる「悪魔くん」旧三巻を安価でおゆずり下さい。
〒352 埼玉県新座市野火止382 〈金井政弘〉

●会員募集してます。サークル〈広場〉・漫画、イラスト、詩など、入会案内書は20円切手同封の方にお送りします。
〒171 東京都豊島区要町1―16 〈林捷二郎〉

●「ガロ」2年分程、あげます。但しうら若き女性、そして取りにこられる方。御一報下さい。
前橋市下小出町360―3 〈宮澤邦一郎〉

●芸術学院発行の「日本漫画家名鑑」と鈴木プロ発行の「日本漫画家名鑑」を格安でおゆずり下さい。漫画を描いている方、将来漫画家になりたい方お便り下さい。
〒332 川口市芝北町3524 〈斉藤一雄〉

募集

●**政岡としや**がアシスタントを募集中自筆のペン画及び履歴書を左記住所へ
世田谷区北沢5―33―11〈政岡としや〉

●株式会社天象儀館では映画・演劇・音楽各分野の新人を公募いたしております。資格は高校在学中程度の学力を有し、且つ、心身共に健康な若者。
連絡先・☎03(312)6254・0425(37)0645

おわび

12月号は誤植やミスが多出しました深くおわびします。

●つげ忠男作品「熱風」②の58Pと59Pが手違いで左右入違ってしまいました。折角の作品の流れをこわしてしまい、作者及び読者諸氏に合せる顔がありません。おわびします。

●鈴木翁二作品「君と旅する」は時間の関係その他で満足な製版ができず、一部お見苦しい点がありました。210頁の最終コマ「いつまでも立ちつくしていたのではなかったか」のかが脱けていました。214頁の「青年にはこの道が遠く山の向う……云々」となるべきところ「この道」の語を重複して植字してしまいました。217頁2コマ目「――この町の人なのかも知れま知れません」の「知れま」は不要です。同3コマ目に「トランクをさげて義歯の……云々」とある前に原稿では（ご承知でしょうボクの父親のことは）とあるのを落としてしまいました。更に作品の終りにある「おしまい」という字は作者がタワムレに欄外に書いたつもりを、そのままバカ正直に入れてしまったという訳で、「ちょっと読者をバカにしてるみたいなのでテッカイしといて下さい」と作者から注文がありました。その他221頁の「就く」は「就中」の誤り、223頁「向げなく」は「何げなく」の誤植です。

●永島慎二遺作集「漫画のおべんとう箱」はその後増ページや附録などつけることになり又発行がおくれ、ご迷惑をおかけしています。12月18日には出来あがる予定です。

ゴシップ

●**永島慎二**氏の「旅人くん展」と併行して同時に氏の古い漫画友だちの**池田耕治**氏が「もうひとつの世界」というタイトルの個展をひらく、場所も同じ清水画廊（12月18日～23日）

●**つげ義春**氏の最新作がマンガストリー（11月17日号）に発表されている。「リアリズムの宿」24P 淡々としたユーモアの旅行物、快作です。

●**ふじ沢光夫**氏の奥方陽子さん（美人！スコブル）は堀切でスナック「カナル」をやっている。常連を集めてふじ沢氏、近頃野球チームをつくったらしい。ユニホームから試合用のトロフィー、賞品なども万端用意がととのっているのだが、今だかって勝ったことがない。どうも金は出る一方だし、栄光はなし、「日拓さんの気持がわかる」オーナーなんてなるもんじゃない、とふじ沢氏。チーム名が「ノータリンムコーミズ」というのも影響があるらしい。何やらいきなり3塁に走る選手などウジャウジャいそうで、試合の相手がつかない。
勝ったこともないが、負けたのもまだ2回だけなのだ。

●**赤瀬川原平**氏は早くも獄につながれたバヤイの対策を着々と練っている。つくろうとすればたやすく作れる機会とはいえ、好きでローゴク入りする人も少ない訳でこの際に色々とヤッテミヨーということらしい。「まず「獄中記」というのは是非ものしたい。獄中記というからには2、3ケ月ではカッコがつかない、せめて半年はほしい。労役にワラジなどもつくってみたいが、こんな牧歌的な仕事はもうさせてくれないだろう。ところで服役するなら是非「模範囚」と呼ばれてみたいものだ、パーフェクトに順法精神にノットルこれが醍醐味、しかし牢仲間に逆うらみされるとヤバイ、意地悪のローナヌシなどにあたるともっとヤバイ、その上その人物がオカマだったりするのは輪をかけてヤバイ、大部屋はイヤですエ、個室にしたい、個室！」〈伸坊記〉

青林堂出版物一覧表

〒101 千代田区神田神保町1－62

振替口座番号・東京135477

赤瀬川原平・唐十郎・鈴木志郎康・吉増剛造 他共著
つげ義春の世界
■B6判・装幀＝赤瀬川原平 定価七八〇円（〒一四〇円）

秋山清著
郷愁論―竹久夢二の世界
■A5判・装幀＝竹久虹之助 定価一二〇〇円（〒一四〇円）

野本三吉著
爆破―人間原型論序説
■B6判・装幀＝赤瀬川原平 定価六八〇円（〒一一〇円）

渡辺一衛評論集
異端の唯物論
―ソ連官僚制社会主義
■四六判・定価九八〇円（〒一四〇円）

上野昂志評論集
沈黙の弾機
■四六判・装幀＝長谷川元吉 定価九八〇円（〒一四〇円）

赤瀬川原平著
新装増補 **櫻画報永久保存版**
■B5判・上製箱入・三五〇頁 ◎予価二、二〇〇円（〒一七〇円）

永島慎二著
フーテン 上・下
■A5判・上製 定価七〇〇円（〒一四〇）

漫画のおべんとう箱
――分冊その1――
■A5判・上製 ◎予価一、四〇〇円（〒一四〇）

ガロ増刊号

池上遼一特集
楠勝平特集
つりたくにこ特集
辰巳ヨシヒロ特集
つげ忠男特集
■定価各二〇〇円（〒四〇円）

つげ義春作品集

――六年間に亘る〝旅の総集編〟――
一九六五・十二ガロ発表『運命』～七〇・二『ヤナギ屋主人』まで、『蟹』を含む二一篇。
■B5判・箱入上製本・四一〇頁 定価一、七〇〇円（〒二〇〇円）

現代漫画の発見シリーズ

滝田ゆう作品集
水木しげる作品集
永島慎二作品集
佐々木マキ作品集
■各巻B5判・箱入上製本・定価七四〇円（〒一七〇円）

林静一作品集

ここ四年間の主要作品に描下し『花に棲む』（彩色描き版四〇頁）を加え、絶賛発売中！
■B5判・箱入上製本・二七〇頁 定価一、六〇〇円（〒一七〇円）

現代漫画家自選シリーズ

①②⑪㉒～㉘㉚五四〇円 ⑲㉙五八〇円
③～⑩⑫～⑱⑳㉑四八〇円（〒一四〇）

林　静一 ①**赤色エレジー**
永島慎二 ②**風っ子**
秋　竜山 ③**あァ！乱痴気人間**
勝又　進 ④**わら草紙**
滝田ゆう ⑤**ぬけられます**
黒鉄ヒロシ ⑥**腹笑死**
砂川しげひさ ⑦**ホンダラ部落**
つげ義春 ⑧**鬼面石**
平田弘史 ⑨**仕末妻**
辰巳ヨシヒロ ⑩**男一発**
真崎　守 ⑪**仮弔封血**
高信太郎 ⑫**怪人二重面相**
岩本久則 ⑬**岩本武蔵**
上村一夫 ⑭**乱華抄**
村野守美 ⑮**媚薬行**
真崎　守 ⑯**ながれ者の系譜・股旅篇**
池上遼一 ⑰**おえんの恋**
真崎　守 ⑱**ながれ者の系譜・ろくま篇**
真崎　守 ⑲**ながれ者の系譜・地獄狼篇**
佐藤まさあき ⑳**蒼き狼の咆哮**
矢口高雄 ㉑**マタギ列伝** 巻之一
宮谷一彦 ㉒**性紀末伏魔考**
山上たつひこ ㉓**喜劇新思想大系**
山松ゆうきち ㉔**くそばばの詩**
矢口高雄 ㉕**マタギ列伝** 巻之二
はらたいら ㉖**セックスピア喜劇**
川本コオ ㉗**ブルーセックス**
永井　豪 ㉘**よくふか頭巾**
かわぐちかいじ ㉙**血染めの紋章** 第一部
青柳裕介 ㉚**陽炎**
かわぐちかいじ ●**血染めの紋章** 第二部
政岡としや ●**狂葬剣記**
平野　仁 ● ？
真崎　守 ● ？
？ ● ？
？ ● ？